

パリ通信・第126号

シャルル・カモワン展

ロシア軍のウクライナ侵略が始まって108日が過ぎた。ウクライナ東部の軍事支配を進めるロシアが攻撃を止める気配はない。子供を含むウクライナ人一般市民の死者は増える一方で、建物は破壊され、6月に入り、ヨーロッパやアフリカに輸出されるウクライナ産小麦粉がロシアに掠奪され始めた。小麦粉を貯蔵しているサイロがミサイル攻撃に遭い、小麦粉を運ぶ大型タンカーが港で立ち往生している。ウクライナの小麦粉が届かなければアフリカは深刻な食料飢饉になる。ガソリン、ガス、電気だけでなく、多くの食料品や生活必需品が急激に値上げされ、フランス人の日常生活への影響も計り知れない。精神面でも悲惨な戦場の映像は見る人の心を破壊する。「聖霊降臨祭」を過ぎて夏のバカンスを楽しむに待つばかりの今、いつまで戦争が続くのだろうかと思うと重く沈んだ気持ちになる。

フランスの6月は晴れて清々しい季節、心を押し潰すニュースを避けてパリ・モンマルトル美術館で開催中の『シャルル・カモワン展』(2022年3月11日から9月11日まで)を観に行くことにした。

シャルル・カモワン (Charles

Camoin)(1879-1965)はマルセイユ生まれのフォーヴィスム(野獣派)の画家である。1897年母親とパリに移り、パリのボザールでギュスターヴ・モローのアトリエで学ぶ。1900-1903年アルル、エクサンプロヴァンスで徴

兵に就き、ここでセザンヌと出会う。徴兵を終えて前衛芸術の中心地であるモンマルトルに戻り、1904年からはアンリ・マチス、アンリ・マンギャン、アルベール・マルケらと共に定期的にサロン出展を行う。サン・トロペ、カシ、コルシカ、イタリアと地中海の都市をフォーヴィスムの画家たちと旅行し、同じテーマで多くの作品を描く。1912年マルケと共にスペインに近いコリウールへ、1912-1913年にはマチスとモロッコの街タンジェに写生旅行をする。フォーヴィスムの画家たちにとって「内面」を描くのが絵画であるから、心が熱いときには砂浜は赤くなり、内面に訴えるならば黄色い犬でも構わない。詳細な形や線を避けるのも、心の自由な躍動に制限を与えないためだ。





1914年から1918年の第一次世界大戦は戦地に赴き、当時の兵隊たちのデッサンや自画像、水彩画が展示されている。大戦が終了すると、マチスと一緒に南仏カーニュ・シュル・メールに移り住んでいたオーギュスト・ルノワールを訪れる。この出会い以降、ルノワールに倣った「裸婦」や「水浴する裸婦」の作品を描く。1920年「ロラ」(シャルロット・プロストの愛称)と結婚し、彼女をモデルにした作品も多い。カモワンの作品にはセザンヌ、マルケ、マチス、ルノワールの影響が明らかで、少数の画家たちだが印象派以後の前衛芸術として一つの流れを提示した。

1939年第二次世界大戦が始まると、60歳

になったカモワンは徴兵を逃れ、サン・トロペでマチスやボナールらと共に絵画に専念する。第二次世界大戦後もパリと地中海を描くフォーヴィスム(野獣派)の画家として出展を続け、1962年生まれ故郷マルセイユで開催された「ギュスターヴ・モローとその弟子たち」展に「水浴する女たち」を描いた。

モンマルトル美術館はサクレ・クール寺院のすぐ側にある。似顔絵を描く画家たちが占拠するテルトル広場から歩いて3分。晴天

も手伝ってサクレ・クール寺院付近は歩けないほどの観光局で溢れていた。2019年コロナ禍以前に戻った混雑に多少躊躇いを感じた。パリからマスクは消え、メトロや列車でもマスク着用はせいぜい1-2割程度に過ぎない。マスクを奪い合ったのが嘘のようで、多量のマスクが薬局やスーパーで安売りされている。日本入国時の水際対策も大幅に緩和され、入国時PCR検査、空港付近での待機、2週間の自主隔離がなくなり、東京・パリ便が以前と同じ運行に戻る。ロシア上空を飛ばないので飛行が3-4時間長くなるが嬉しいことだ。コロナ・ウイルスは変異を繰り返し、感染力はあっても致死率が低くなり終息と見做された。と同時に4回目ワクチン接種が推奨されているが、3月末コロナ感染した私は4回目はもう少し先に伸ばそうと思う。

